

中国語の授業における指導法に関する一考察

— 中国語検定試験の受験結果に基づいて —

Consideration about a Teaching Method in the Class of Chinese

— Analysis by the Results of the Chinese-Proficiency Tests —

藺 梅*

Mei Lin

本稿は、本学で中国語を学んでいる受講生が中国語検定試験を受けた結果に基づき、中国語の授業における指導法を検討したものである。本稿では、教室という学習環境で指導を受けた中国語の学習者の習得状況を分析し、現在本学で行っている中国語の授業における指導法について考察した。その結果、本学の学習者が中国語の理解力の上達がみられる一方、音読及び中国語の文法の運用能力が弱いことが明らかになった。

キーワード：教室第二言語習得、文法指導、明示的言語学習、中国語検定試験

I. はじめに

日本では大学に入学してから中国語を学び始める学習者が圧倒的に多い。また教養科目として授業回数が週に 2 回である大学も一般的だ¹⁾。本学にも必修科目として英語と中国語がいずれも週に二コマ設置されている。中国語は初修言語としてスタートするが、一年次後期から「観光中国語特別選抜クラス」(以降「特別クラス」と称する)が開講され、このクラスでは目標を立てハードな中国語学習が始まる。その目標の一つが、「中国語検定試験」に合格することである。

「中国語検定試験」について中国語検定試験協会のホームページに、「中国語学習者に対し、学習成果を正しく測る客観的評価基準を提供し、ひいては中国語学習意欲の増進を図ることにあります。この姿勢は社会的評価として定着し、大学にあっては単位認定、企業にあっては採用・配置転換・人事評価等に利用されることが増えてまいりました。」²⁾と書いてあるように、より客観的に自分の中国語のレベルを図ろうとする場合、まずこの試験に挑戦することとなる。また、徐子亮・呉仁甫(2009)も検定試験について：“外国人向けの中国語教育の特徴は言語知識と言語運用能力を結び付けて総合的に検定を行うことである。”³⁾と指摘された。したがって教師という立場から、特別選抜クラスでの指導において効果的な方法であるかどうかについて検証すべきだ

*流通科学大学人間社会学部、〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

と考えている。

本稿では、まず教室での「第二言語習得研究」についての理論を確認しつつ、本学の中国語の授業形態が「教室第二言語習得」についての研究のどの領域になるかを明確にするうえで、「観光中国語特別選抜クラス」の4年間（2011-2014）「中国語検定試験」受験の結果⁴⁾、特に筆記試験の結果に基づき分析し、現在行っている指導方法の問題点を探ってみる。

II. 第二言語習得 (Second-Language Acquisition) 及び教室第二言語習得 (教室 SLA)

1. 第二言語習得の定義

本稿では日本人学習者の中国語の習得のことを「第二言語習得」としている。日本の中高学校で学ぶ外国語が主に英語であることから中国語は第二言語にならないと思われるかもしれないが、第二言語習得の定義については様々な説があり、Cook (1991) は次のように述べている。「『L2 学習』というとき、それは、場面や目的を問わず、第1言語以外の言語の学習をすべて含むものとする。」⁵⁾

また、このような説もある。劉 (2007) 「第二语言习得 (Second Language Acquisition, SLA) 包括母语之外的所有语言的习得研究, 研究对象一般是成年人。换句话说, 除非有必要, 我们一般不说第三语言习得, 第四语言习得等。」⁶⁾ (第二言語習得は母国語以外のすべての言語の習得研究を含む。研究対象は一般的に成人である。言い換えれば、必要でない限り第三言語習得や第四言語習得という言い方を使わない。)⁷⁾

以上の説にしたがって、本稿では中国語を習得することを第二言語習得としたい。本学では受講者が中国語、英語のいずれか一言語を学習するため、いずれ第二言語の習得になると考え、さらにこのようにすることで日本での英語教育に関する習得研究の成果を大いに参考することができるかと考えている。

2. 教室第二言語習得

第二言語習得とは無論母国語以外の言語を身につけることであるが、習得する環境によって研究する領域が分けられている。大学で第二言語習得といえば、「教室第二言語習得」または「指導を受けた第二言語習得」となる。「指導を受けた第二言語習得とは、主に教室環境で教師から第二言語の指導を受けることによって、学習者の第二言語能力が変化することを意味する」⁸⁾

教室 SLA または指導を受けた第二言語習得の領域を概観すると、「フォーカス・オン・フォーム」、「インプット処理」、「インタラクション」、「アウトプット」、「明示的・暗示的指導」などについて先行研究が進められているが、本学の中国語学習の授業形態からみて、表1で示されたように本学の指導法は「明示的・暗示的指導」の領域に属するのが妥当だと判断する。

第二言語習得において文法指導がどのような役割を果たすのか、さまざまな考え方があ

法知識を一つ一つ身につけていけばいつか総体としての言語運用能力が完成するという文法指導観では、文法は学習の対象物であり、レンガ（文法規則）を積み重ねて建物（言語運用能力）を建てることと同じようなものとして言語習得がとらえられる。⁹⁾

さらに、第二言語習得の「文法を重視する教室指導」の中でも、インプット・中間言語・アウトプットなど多岐に分けられているが、現在本学の特別選抜クラスで行っている中国語の授業では、教科書の学習と検定試験の受験指導を同時に進めることとなるが、毎週の二コマの授業もそれぞれ教科書の内容に沿って文法項目を解説し、その文法の理解確認として練習問題を解くという形式で進める。受講者にとって教師の指導を受け、教科書の内容を理解することは中国語授業の主な形態となり、いわゆる明示的言語学習になる。

表 1. Doughty & Williams に基づく暗示的および明示的言語学習¹⁰⁾

領域	「暗示的」	「明示的」
中間言語知識（心的表象）	生得的（普遍的） 直感的 事例基盤型	明示的（分析的；言語個別的） 規則基盤型
中間言語規則へのアクセスと運用	自動的（心的努力不要） 流暢	計画的（心的努力必要） たどたどしい
学習分析（体系的規則の発見）	帰納的 付随的	演繹的 意図的
注意	無意識的	意識的
言語使用力の発達	経験的	練習による
指導の介入	非妨害的またはなし	顕在的、妨害的、メタ言語的

出所：白畑知彦ほか：『詳説第二言語習得研究』第6章「指導と第二言語習得」（2010）

したがって本稿では、本学の中国語の授業形態から、教室での文法指導がメインである明示的な指導法による習得状況に焦点を当てたい。



図 1. 教室での中国語の授業形態(筆者作成)

3. 「明示的」言語学習についての先行研究¹¹⁾

明示的学習・暗示的学習に関する指導効果の研究には複数の先行研究があるが、そのうち、英語学習の被験者の104人中95人が日本語母語話者であるRobinson(1996)の研究の結果を確認したい。Robinson(1996)は被験者を4つのグループに分け、i 暗示的条件(implicit condition)、ii 規則検索条件(rule-search condition)、iii 付随的条件(incidental condition)、iv 明示的指導条件(instructed condition)と名付けた4つの異なる学習条件を与え、文法性判断テストをし、上記の4つの学習効果の比較を行った。その結果明示的指導条件のグループは他の条件で学習した被験者より正確性に関し有意に高いことが分かった。同時に、もう一つ注目すべき結果も出たが、それは明示的学習をした被験者が難しい規則の文法があるテストでは有意差が認められなかったことである。即ち、この先行研究は、明示的指導を受けた学習者は一定のレベルの文法規則の判断が優れていることが認められるが、レベルが高くなるにつれ、その指導法の不完全性があるということを示唆している。

では、本学の「特別クラス」での習得状況はいかなるものか、4年間の中国語検定試験の結果から検証してみたい。この検証方法の理由として、「中国語検定協会」のホームページで明示されたように、“中国語学習者に対し、学習成果を正しく測る客観的評価基準を提供し、ひいては中国語学習意欲の増進を図ることにあります。”また、侯(2012)「検定試験は“教えること”と“学ぶこと”に対してフィードバックの働きをし、学習者の学習ストラテジーに影響を与える。」¹²⁾の二点が挙げられ、「特別クラス」の受講者の中国語検定の筆記問題のスコアから授業での習得状況を検証してみたい。

III. 中国語検定の結果の考察

1. 調査対象者

本研究の調査対象者となったのは、本学の2011年から2014年までの「観光特別選抜クラス」に在籍し、且つ中国語検定を受験した受講者である。本学では中国語の「観光中国語特別選抜クラス」は2009年度から開講したが、毎年中国語検定試験を受験することになったのは2011年度からである。今回の分析に使用したデータはその四年間の中国語検定4級及び3級のスコアの結果となっている。

表2. 中国語検定試験スコア平均値(注:各項目の数値は20が満点である)

	発音・声調	空欄埋め	並び替え	長文読解	翻訳
4級(受験人数)					
2011(9)	13.55	13.55	13.77	14.66	12
2012(5)	9.6	16.4	16.4	14	11.2
2013(8)	11.5	15.5	14.75	17.38	14.38
2014(6)	12	15.67	17.33	12.17	13.33
3級(受験人数)					
2011~2014(9)	13.33	16.88	14.44	12.11	8.22

(中国語検定試験の成績により筆者作成)

2. 分析データ

添付資料1に一覧にしたのは4年間の3級、4級の中国語検定試験の受験の結果であるが、本稿では筆記の各項目のスコアを対象にして検証することにする。リスニングのスコアを対象にしない理由は、本学での中国語の授業の形態は教科書による文法指導がメインになっているため、検定試験のリスニングの結果は授業の指導法を反映するものとは言い難いからである。一方、筆記試験は「発音・声調、空欄埋め、並び替え、長文読解、和文中訳」の五つの項目からなり、中国語検定試験の筆記試験問題の特徴について、侯（2012）は以下のように述べている。「1、知識と技能の両方を図ろうとしている教育観、試験観を反映している。2、発音、文法、読解、和文中訳の出題により、言語習得の達成度を全面的に測定し、試験の妥当性を保証しようとしている。3、客観問題を主にして、主観課題も加えることにより、信頼性を確保しながら妥当性を高めようとしている。」¹³⁾

したがって本学で行った授業の指導法から、学習者の言語習得の達成度はいかなるものか分析してみる。

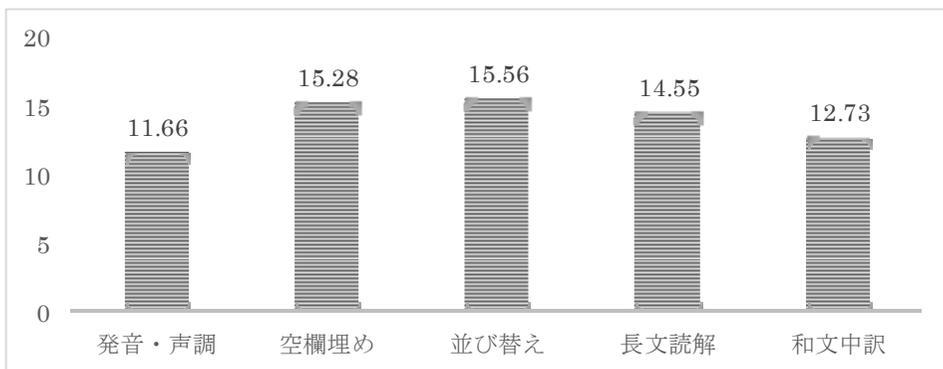


図2. 2011-2014 中国語検定4級4年間スコア平均値

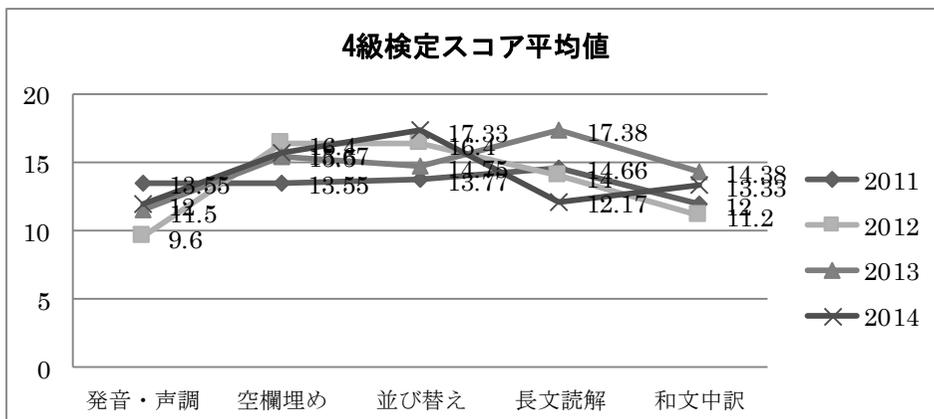


図3. 2011-2014 中国語検定4級各年スコア平均値

3. 結果についての考察

まず、表2で示したデータを踏まえ考察したい。本学での中国語授業の設置は4セメスターまでになっているため、中国語を学習する時間数から4級を受けることが妥当である(資料2参照)。したがって、毎年の受講生はほぼ4級を受けることとなる。3級を受ける受講生は個別で指導することとなるが、指導方法は文法がメインである授業と同様なため、そのデータも本研究の分析対象としたい。

次に、4級の結果を考察する。図2で示した通り、トータルで4年間の成績を確認すると、各年度のスコアの数値が違うものの、毎年の結果の傾向はほぼ一致しているとみられる。筆記試験の5項目の中の「発音・声調」の平均値が最も低く、11.66(2011-2014の平均値)となっている。この項目は言語の知識であり、語彙の量や音読トレーニングの頻度に関わる。一方ほかの4項目はすべて文法に関わる問題だが、高い数値から「並べ替え」15.56、「空欄埋め」15.28、「長文読解」14.55、「和文中訳」12.73の順となっている。「並べ替え」と「空欄埋め」の項目に与えた条件が多く、判断しやすい問題となっているが、「長文読解」と「和文中訳」のほうは文法を総合的に運用する問題となる。この結果はほぼ問題の難易度と正比例となる。

中国語検定第84回4級の過去問題の「並べ替え」の問題形式を見てみよう：

(6) わたしは図書館であなたを待ちます。

我 _____ [_____] _____ 。 ①在 ②等 ③图书馆 ④你

(7) 彼らは、みな来たというわけではありません。

_____ [_____] _____ 。 ①都 ②没有 ③他们 ④来

上記に示した例題のように、この項目は文法の運用能力を問う問題だが、日本語文に合わせ、与えられた語彙を並べ替えるのみとなり、語彙を覚えているかどうかとは関係ない。また、その次に正解率が高い「空欄埋め」の例題を確認すると：

(2) 我家() 超市只有一百米。 ①向 ②从 ③在 ④离

(3) 你() 游多远? ①在 ②会 ③能 ④有

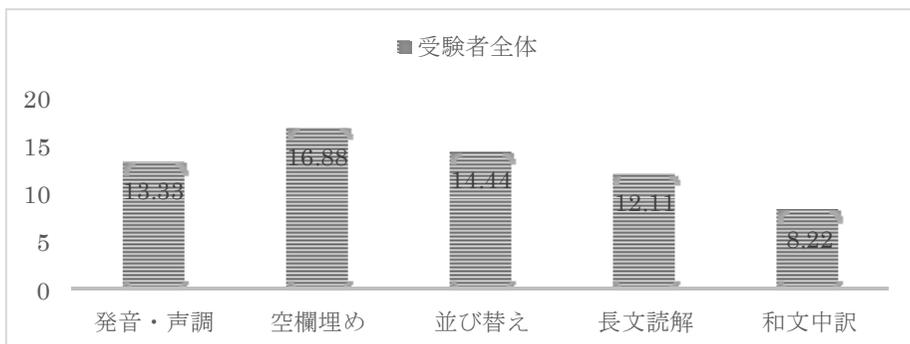


図4. 2011-2014 中国語検定3級結果平均値

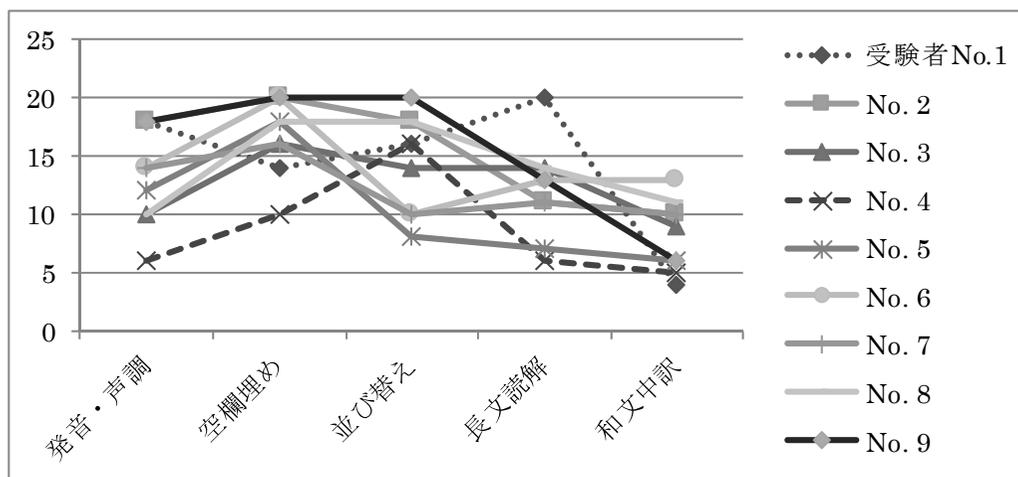


図 5. 2011-2014 中国語検定 3 級結果の分布

同様に与えられた 4 つの選択肢を判断する問題であり、単純な文法知識が求められ、高得点が得られやすいといえよう。一方、「和文中訳」も文法の運用能力を問う問題だが、この項目のスコアは 5 項目の中で最も低いこととなっている。この項目は文法規則の総合的な運用能力をはかるものとなり、和文によって語彙、慣用表現及び文法規則をどれが必要なのかはすべて自分の記憶と判断により訳さなければいけない。

最後に 3 級のスコアの結果を確認しよう。問題形式が 4 級と同様であるが、語彙数と文法規則のレベルは高くなっている。図 3 で示したように、傾向としてはほぼ 4 級の結果と似たことが認められる。得点の高い順から「空欄埋め」、「並び替え」、「発音・声調」、「長文読解」、「和文中訳」となっている。ただ、3 級のスコアは 4 級と比べると、「和文中訳」の得点はとても低いことが明らかである。

以上、本学の「特別クラス」の四年間にわたり中国語検定試験を受けた結果に基づき考察した。概観すると二点まとめられる。一点目は 4 級の成績は 4 年間の傾向ほぼ一致していることである。4 級の検定試験を受ける受験者は、ほぼ教室で指導を受けた後受験するため、結果は教室での習得状況の反映だといえよう。二点目は、3 級の検定試験を受けた受講者は前述のように、「特別クラス」は 4 セメスターまで終了するため、受験指導が不可能となる。したがって、3 級の受験者は個別の指導を受けたとしても、3 級のレベルの学習は不十分のまま受験することとなる。図 3 で示したように個人差が大きな開きが見られる。さらに、3 級の筆記の中の「和文中訳」がほかの項目と比べ、最もスコアの数値が低く、やはり高度な文法規則を用いて運用する能力が欠けているといえよう。

IV. まとめ

第二言語習得において、学習者の年齢、学習ストラテジー、中間言語の処理など様々な要素が働きかけているが、「教室での外国語教育の質に与える様々な要素の中で、教師、学習者、教材、環境が最も基本的な要素となる」¹⁴⁾ 本稿では、本学での「特別クラス」の中国語検定受験の結果に基づき考察したことにより、教室での指導は学習者の習得状況を大いに左右することが明らかにされた。現在行っている授業での問題点として、①「発音・声調」の結果から教室での音読トレーニングが不足しているとみられる。②文法指導において学習者は文法規則を理解したものの、総合的な運用能力が非常に弱いことが「和文中訳」の結果で分かった。

今後の中国語の授業において、リスニングにも繋がる音読トレーニングを強化しなければならないうえで、文法規則を総合運用する力も鍛えなければならない。中国語授業の時間数が限られているため、以上の二点を達成するには、教材や時間外の自習スタイルの確定などのことも課題となる。

「教室環境で第二言語に触れ、指導を受けながら第二言語能力を伸ばしていく学習者は、世界中で大変な数に上る。言語や文化の異なる人々同士が意思伝達をはかるためには、第二言語の力が必要となる」¹⁵⁾ 今後も引き続き、明示的学習における各領域を総合的に考慮し、教室でどのように指導するほうが効果的なのか、どのように工夫すべきかについて、実践しながら研究していきたい。

添付資料：

資料1. 2011年-2014年中国語検定スコア一覧

4級		リスニング		筆記				
年度&受講者数		短文	長文	発音と声調	空欄埋め	並べ替え	長文読解	翻訳(短文)
2011年	1	30	40	14	8	14	17	14
	2	40	50	18	16	16	20	18
	3	40	45	18	16	20	17	17
	4	35	40	14	12	12	13	10
	5	25	30	16	14	14	17	10
	6	25	20	12	14	12	20	9
	7	15	35	8	16	14	10	11
	8	15	25	6	10	10	8	8
	9	30	45	16	16	12	10	11
平均点		28.33	36.66	13.55	13.55	13.77	14.66	12
2012年	10	45	20	6	16	12	16	7
	11	25	25	10	14	20	6	9
	12	45	40	12	18	18	17	14
	13	50	35	6	16	14	17	12
	14	50	40	14	18	18	14	14
平均点		43	32	9.6	16.4	16.4	14	11.2
2013年	15	40	35	12	18	18	20	17
	16	40	30	14	18	14	20	15
	17	35	35	14	14	14	17	11
	18	45	20	10	20	12	20	15
	19	45	30	16	14	16	20	17
	20	45	25	10	16	20	16	17
	21	30	30	12	10	14	9	14
22	30	25	4	14	10	17	9	
平均点		38.75	28.75	11.50	15.50	14.75	17.38	14.38
2014年	23	45	40	16	12	18	7	13
	24	30	40	14	20	20	13	14
	25	25	35	4	16	18	9	13
	26	20	25	14	14	18	10	13
	27	30	35	12	14	18	14	14
	28	25	40	12	18	12	20	13
平均点		29.16	35.83	12	15.67	17.33	12.17	13.33

3級受験結果

3級(4年間)		リスニング		筆記				
受験者No.	短文	長文	発音	空欄埋め	並び替え	長文読解	翻訳	
1	35	45	18	14	16	20	4	
2	30	35	18	20	18	11	10	
3	20	45	10	16	14	14	9	
4	20	30	6	10	16	6	5	
5	20	20	12	18	8	7	6	
6	30	20	14	20	10	13	13	
7	45	35	14	16	10	11	10	
8	40	45	10	18	18	14	11	
9	50	50	18	20	20	13	6	
平均点		32.22	36.11	13.33	16.88	14.44	12.11	8.22

資料 2. 中国語検定試験認定基準（3級・4級）

4級	<p>中国語の基礎をマスター</p> <p>平易な中国語を聞き、話すことができること。</p> <p>(学習時間 120～200 時間。一般大学の第二外国語における第一年度履修程度。)</p> <p>単語の意味、漢字のピンイン（表音ローマ字）への表記がえ、ピンインの漢字への表記がえ、常用語 500～1,000 による中国語単文の日本語訳と日本語の中国語訳。</p>
3級	<p>自力で応用力を養いうる能力の保証（一般的事項のマスター）</p> <p>基本的な文章を読み、書くことができること。</p> <p>簡単な日常会話ができること。</p> <p>(学習時間 200～300 時間。一般大学の第二外国語における第二年度履修程度。)</p> <p>単語の意味、漢字のピンイン（表音ローマ字）への表記がえ、ピンインの漢字への表記がえ、常用語 1,000～2,000 による中国語複文の日本語訳と日本語の中国語訳。</p>

出所：「日本中国語検定協会」ホームページ：<http://www.chuken.gr.jp/>

引用文献、注

- 1) 郭春貴：「1 周 2 节课の 2 外汉语教学模式探讨」『中国語教育』 中国語教育学会（2014.3）p1
- 2) 「日本中国語検定協会」ホームページ：<http://www.chuken.gr.jp/>
- 3) 侯仁鋒：「试析日本汉语检定考试 3 级笔试试题」『中国語教育』 中国語教育学会（2012.3）pp168-169
- 4) 添付資料 1 参照
- 5) 津田塾大学言語文化研究所 編：『第二言語学習と個性』 春風社（2006.3）pp50-51
- 6) 刘松浩：『第二语言习得导论』 世界图书出版社（2007.12）p4
- 7) 筆者注訳
- 8) 白畑知彦・若林茂則・村野井仁 共著：『詳説第二言語習得研究』 研究社（2010.7）pp117
- 9) 小池生夫 編集：『第二言語習得研究の現在』 大修館書店（2009.12）pp112-115
- 10) 第二言語指導において、習得を目指す言語項目を学習者がはっきりと意識するよう教える場合と、説明はせずに「自然に」該当言語項目を習得するよう教える場合がある。前者を「明示的学習」と呼び、後者を「暗示的学習」と呼ぶ。この二つのタイプが、学習者の言語発達にどのような影響を与えるかを調べることは、第二言語習得のメカニズムを明らかにする上で極めて重要な意味を持つ。
- 11) 白畑知彦・若林茂則・村野井仁 共著：『詳説第二言語習得研究』 研究社（2010.7）p161
- 12) 侯仁鋒：「试析日本汉语检定考试 3 级试题选项的编制」『中国語教育』 中国語教育学会（2014.3）pp136-138
- 13) 侯仁鋒：「试析日本汉语检定考试 3 级笔试试题」『中国語教育』 中国語教育学会（2012.3）p155
- 14) 杨惠元：「试论课堂教学研究」『语言教学与研究』 北京语言大学语言科学院（2004.No.3）pp37-41
- 15) 白畑知彦・若林茂則・村野井仁 共著：『詳説第二言語習得研究』 研究社（2010.7）p165